

2023
秀作

第21回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

「素直」になって

東京都・筑波大学附属高等学校 2年 三浦 愛紗美

昨年の8月に高校の馬術部の合宿で北関東のある県を初めて訪れた。その県は、都道府県の魅力度を順位付けしたランキングの下位常連県で、住民が、ここには誇れるものがない、などと言って笑いを誘っている場面をテレビなどでしばしば目にしていた。そのため私もその県への関心は低く、合宿場所として案内された時には軽い失望を覚えた。

ところが、実際にその県を訪れてみると、私の先入観は完全に崩された。最寄りの駅から合宿場所へ向かうバスの窓からは、沖縄のサトウキビ畑に似たトウモロコシ畑が、丘陵地に沿って波打つように広がっている。その向こうには、富士山のそれのように雄大な裾野と、今まで見たことがない独特の形状を持つ美しい山々が連なって見える。反対側の窓に目を移すと、傾斜地で下っていくトウモロコシ畑の先に、地平線まで続いているかのような平野が遥かに望める。標高の高さで朝晩の気温が低下するエリアが多く、水も清冽なためか、野菜が美味しい。普段は肉を好む私も、この県での食事では真っ先に野菜に箸を伸ばす。さらに標高が高い場所に行けば、日中でも気温が低く、東京で35度を超える日の昼間でも20度位と肌寒さすら感じる。まさに避暑地である。この県が魅力に乏しく誇れるものが少ない場所とされていることに驚きを感じるとともに、この県への興味を強めた私は、合宿以外でも家族で当県を訪れたり、その県についていろいろ調べたりしている。

住民の言葉をメディアが面白おかしく取り上げる行為が過ぎると、住民が謙遜に加え、その場を盛り上げるためのある種のおもてなしの精神で自県につき諧謔的に話す内容が、事実として流布、定着してしまう恐れがある。そうなれば、その県が本来持っている価値が不条理に下げられてしまう。このような事態は、他の県でも生じている。

日本人は概して謙遜を好む。謙讓の美德という言葉が示すとおり、日本では、

自己主張やアピールではなく一歩下がって謙遜する行為が好まれる。この傾向、いわば文化は、日本国内で対人関係を円滑にするためには有効だ。一方で、異なる文化を持つ人々との間では、かえってコミュニケーションを阻害する一因となりかねない。世界において、謙遜の習慣がこれほど強く根付いている国は、おそらく日本以外にはあまり存在しないため、外国人の多くは、謙遜による発言内容の行間、あるいはその場の空気を読むことなく、発せられた言葉そのままに理解するだろう。

中学生の頃から、海外の学生たちと交流し議論を重ねる場面をいくつか経験してきた。彼らは、自分の考えや意見を積極的に表明する。日本人であれば、この意見は正しいだろうか、この場の空気にそぐわないのでは、などと逡巡し、躊躇することが少なくないが、彼らはその意見が正しいか否かなどを考える前にまず相手に伝える。そのうえで議論を行う。異なる文化を持つ人間どうしであれば、行間を読むことなどできない。そのため、自分の考えや意見をしっかりと相手に伝え、議論という双方向のコミュニケーションをとることで、お互いの理解を深めていく。

また、彼らはほとんど謙遜しない。謙遜により事実と異なる内容を伝えてしまえば、それは誤ったコミュニケーションに繋がる。素晴らしい事を成し遂げても、「たいしたことはしていません」と言えば、そのまま文字どおりに理解される。私は高校で弓道部にも所属するなど、日本の伝統文化を心の底から愛しており、いわば日本的価値観を典型的に持っているが、海外の学生たちの言動を目の当たりにすることで、グローバルスタンダードとは何か、について衝撃を受けつつ学んだ。

バブル崩壊後の1990年代初頭からの日本では、「失われた30年」と呼ばれる経済の低迷や景気の横ばいが続いている。私たち高校生はまさにそのような時代に生まれ育っており、内閣府の2021年度国民経済計算年次推計（フロー編）によると、私が生まれた前年の2005年に10.1%だった世界の名目GDPに占める日本のシェアは、2021年には5.2%とほぼ半減してしまっている^{注)}。また、2020年のCovid19パンデミック発生や、2022年のロシアによるウクライナへの本格的な軍事侵攻開始といった世界的な危機は日本にも深刻な影響を及ぼしており、失われた30年で弱まった日本経済に対しさらなる打撃を与え続けている。

幼い頃から、実際に戦争を体験した祖父母たちの話を聞いて育ったこともあり、私は世界平和の実現について本気で考え続けてきた。この壮大なテーマを机上の空論ではなく現実のものとするために、私たちはそれを実現することができる相応の経済力を持たなければならない。世界規模の社会課題解決に貢献するために、日本は停滞している場合ではない。

日本経済の停滞の要因は何か。米国のある大学が主催するプログラムに昨年から今年にかけて参加した際、私はこれを自らの卒業論文テーマとした。その研究プロセスにおいて、様々な要因が複層的に絡み合っている構造の複雑さを把握し、日本経済復活への道は簡単ではない現状を理解した。一方で、その後も様々な考察を重ねる中で、極めてシンプルな要因もあるのでは、ということに思い至った。それが、「謙遜の文化」である。

繰り返しになるが、私は日本の伝統文化の信奉者である。しかし、謙遜は海外の人々には理解されにくい。「私の県は魅力が低く誇れるものは何もないのです」と海外の人に謙遜して話せば、「魅力的な場所ではないのだな」と言葉どおりに理解されるのが一般的だ。同様に、日本に関わるものについて、たいしたことはない、たとえば、その言葉はそのまま受け止められてしまうだろう。このような小さな行為の長期に亘る膨大な積み重ねが、日本の価値毀損に繋がっている可能性は否定できない。

「失われた30年」が始まった1990年頃は、いわゆるグローバリゼーションが本格化した時期と重なる。先人たちの尽力により経済大国化を成し遂げた日本だが、グローバリゼーション進展への対応として必須要件である、日本人一人ひとりのグローバルスタンダードへの順応が不十分だったのではあるまいか。そして、その一因は、日本人が本来は美德として持つ、謙遜する文化にあるのではないか。

国内で自分の県について謙遜した発言を行うことはともかく、海外に対し自分たちのことについて謙遜を行うことは、正確な理解の妨げになりかねない。良いものは良いと謙遜せずにそのまま伝え、発信していく、それは「アピール」というよりも、ある意味での「素直さ」であるとも言える。つまり、コミュニケーションにおけるグローバルスタンダードとは、あえて単純化すれば、事実を素直に発信することでもあるのだ。

このようなグローバルスタンダードに則^{のつと}ったコミュニケーションにより、私たちは自らを、そして自らの価値を相手に正確に理解してもらうことができる。それは、たとえば、海外に日本のモノやサービスを売る際にも、海外から投資を受ける際にも、海外と協働する際にも、必ずや有益なものとなるはずだ。

複雑で難易度が高い方策とは別に、こうした意識の変化、素朴な行為の積み重ねが、日本経済の復活に寄与し、ひいては、その経済力を有効に活用して日本が世界平和実現や社会課題の解決に貢献を果たすことに繋がる。これは、あまりにも単純で飛躍しすぎた愚論暴論かもしれないが、ここは逡巡、躊躇、謙遜せず「素直」に、自らの意見と主張をそのまま明確に表明することとする。

(注)

内閣府 経済社会総合研究所「2021年度（令和3年度）国民経済計算年次推計（フロー編）」

URL https://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/data/data_list/kakuhou/files/2021/sankou/pdf/point_flow20221223.pdf

閲覧日 2023年8月24日

